

ひかわ玲子

女戦士エフエラ&シリオラシリーズ

死海の勇者

紫の大陸
ザン1



女戦士エフェラ&ジリオラシリーズ

しかい ゆうしや

死海の勇者 紫の大陸ザーン①

著 者 ひ か わ 玲 子

発行者 塚 田 友 宏

発行所 株式会社 大 陸 書 房

〒113東京都文京区本郷2-3-9

電話03-814-7441(販売)

03-814-5693(編集)

振替口座 東京1-56612番

印刷・製本 中央精版印刷(株)

乱丁・落丁のものは小社またはお買求めの書店にてお取替え致します。
定価はカバーに表示してあります。

© REIKO HIKAWA 1989

ISBN4-8033-2379-8

エッセイシリーズ

海の勇者

紫の大陸
ザン
1

ひかわ玲子



メイフレーション／米田仁士

目次

プロローグ 7

第一章 フォドレス港の乱闘 16

第二章 ホッド侯爵の城 59

第三章 エックブルト大公国宮廷の白い影 91

第四章 バーゼン橋の攻防 129

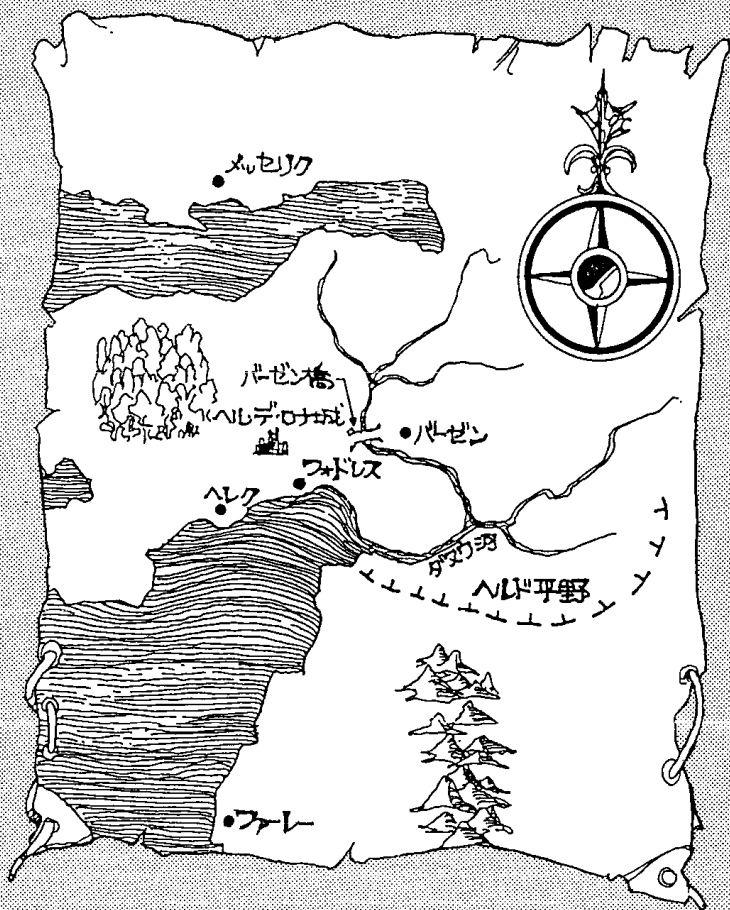
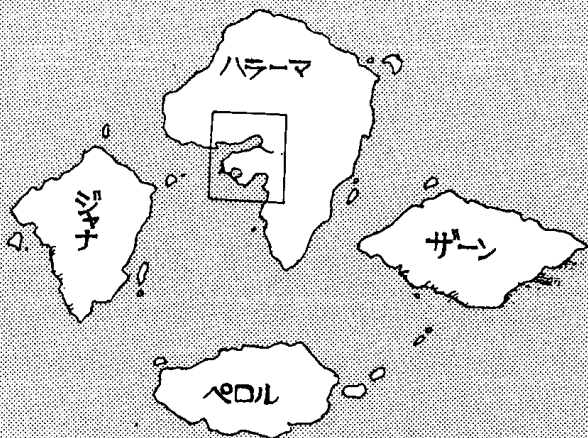
第五章 一角亭 161

第六章 宝印の行方 185

第七章 黒死海の海戦 208

第八章 双頭竜の洞窟 236

あとがき 255



(エックブルト大公家)

エレーヌ

ミューゼル一世

ヘイレス侯

ホッド侯

マイセル大公子(養子)

ファミラ

ロレーヌ

ルゼラ

ミューゼル二世(三男・養子)——ロミラ

ザーレル二世

ワレス侯(次男・亡)——シェスル侯

ヤレル侯(長男・亡)——アレース侯(亡)——リイラ

(シャーガン公家)

タニーラ(ミューゼル一世の姉)

シャーガン・ラス公

エセラ——シャーガン・フェラー公(現・シャーガン公爵)

シャーガン・ユム公(レイティラ皇女の名目上の夫)

(オカレスク皇家)

ダニエラ皇后

ソードン帝(86代皇帝)

ロディラ女帝(87代皇帝)

ジリオラ皇女

セミラ王妃

レイティラ皇女

ズロン皇子

オルメラ王妃

[ハラーマにおける暦]
16か月にて1年(太陰暦)

- 1月 火の陰月
 - 2月 オリガの土の月
 - 3月 水の陰月
 - 4月 ゼルクの水の月
 - 5月 風の陰月
 - 6月 ゼルクの風の月
 - 7月 土の陰月
 - 8月 オリガの二の土の月
 - 9月 オリガの風の月
 - 10月 ゼルクの土の月
 - 11月 火の二の陰月
 - 12月 オリガの火の月
 - 13月 ゼルクの二の風の月
 - 14月 オリガの水の月
 - 15月 水の二の陰月
 - 16月 ゼルクの火の月
-

プロローグ

緑の鬱蒼とした森……また、森。

視界の果て、眩しい光を放つ地平線の丸い境界まで続くその緑の海は、蛇行する幾筋もの線によって分断されている。

線は、太陽の光をあびて金色に輝いている。

緑の高価な布の上に落ちた、黄金の首飾りのように。

「あれ……ダヌウ河かな、エフェ？」

「——じゃない？」

あの地平線すれすれに見える青いのが海ね。ダヌウ河は海に注いでいるはずだから」

「……てえことはっ、と」

馬に乗った黒髪の女戦士は、その長いたてがみのような髪をうるさげに掻き上げながら、うろんげに言葉を吐き出した。

「このあたり……もうエックブルトの領土の端っこだね」

「——たぶん」

その傍らに馬を進めたもうひとりの、肩のあたりで髪を束ねた、青い髪の女戦士はなげやりの態度で答えた。

青い髪の女戦士が乗る馬の鞍の前にはちよこんと金髪の少年が座っている。

少年は不安げに青い髪の娘の顔を振り仰いだ。

青い髪の娘は青いマントを、黒髪の娘は薄汚れた茶色のマントを身につけている。あとの格好はふたりともほぼ同じ……よく傭兵がしている、乗馬に適したズボンと短衣、ブーツといったでたちである。

晴れた良い日和だったが、遠く空彼方に見える黒っぽい雲がその天気の変りやすさを暗示していた。

黒髪の女戦士は黒い瞳を、青い髪の娘は薄い澄んだ紫色の双眸を、目の前に向けている。

そこにあるのは、ハラーマ大陸にあってムール帝国をも脅かす存在となりつつある中原の覇者たる国・エックブルト大公国の広大な国土である。

金色に輝く水脈……ダヌウ河はこの国を発展させた源となった大河だ。

河はヘルド平野を横断し、遠くウィラ山脈まで届いている。また、その支流はこの国を支えるもう一本の河・デレマー河とも繋がっている。

豊かな水源と、黒森と呼ばれる濃い緑の、どこまでも続く森……そして、河沿いを黒死海や内海に向かって繁栄した数々の城塞都市。そこから生まれる有り余る富があってこそ、ハラーマでエックブルト大公国は勢力を伸ばし、領土を拡張してきたのである。

馬が風にまじった潮風に反応したのか、微かにいななきをあげた。

「ジーラ」

青い髪の娘は呼びかけた。

「ん？」

「……引き返すんなら、今のうちだと思うけど？」

「ここまで来て、エフェ？」

「そりゃ……ね。あたしとしてはまあ、ありがたい儲け話でもあるようだし、十分魅力的だけど、でも、なんか、話が妙だし。」

最初っからうさんくさいってのはどうも、ね。

気に入らないわ」

「でも、あの手紙はホンモノだろ？」

黒い髪の娘・ジリオラは行儀悪く、ぼりぼりと髪を掻きむしった。

「それに、金は無いしい……」

——ジリオラのその言葉を聞いた途端に、青い髪の娘・エフェラは不機嫌な顔になった。

（お金……ねっ！）

まあったくっ！ どうして、お金ってのは、稼いでも稼いでも無くなるんだろう！

ジリオラは、服の胸の隠しからちいさな布の包みを出し、そこから銀色のメダルを取り出した。

メダルをみつめた目には、当惑の色がある。

「にしても、今頃になって！」

ジリオラはつぶやいた。

「まさか、こんなメダルが出てくるとはね！」

「にせものかもしれないわ」

エフエラは無表情で応じた。

「そのメダルにどういう意味があったのかはわかんないし、実のところ、そこらじゅうに転がっているもんかもしれない」

「あの時のことを知っているのは、あの人だけだろう？」

でも……格好の土産話みやげかなんかになっていそうな話だし」

「話だけじゃ、このメダルのことまではわかんないよ」

「メダル自体にたいして価値はないなら……あの人は誰かにあげちゃったかもしれないわ」
ジリオラはその可能性を考慮するように、考え込む顔でしばし首を傾げた。

それから、頑固に首を振った。

「そんな人じゃなかったよ。」

やっぱり、確かめよう。

もしあの人なら……恩は恩だ」

（恩は恩……ね）

実際、ジリオラらしいセリフだと思う。

あの時、のこと——をエフェラも思い出す。

若い、身分ありげな剣士。取り巻きとおぼしき腕の良い剣士を連れていて、彼自身も身震いするほどに手練の剣士だった。

エフェラとジリオラは、今の半分の背丈ほどの子供だった。旅を始めていくらもたっていない頃だと思う。まだ世間というものの警戒心も薄い頃だったから今だったら決してひっかからないような悪徳商人の親切な罠、という奴にひっかかり……ファレーの奴隷市場へあやうく売り飛ばされそうになっていた。ジリオラは怒り狂って暴れまわり、エフェラは使える限りの幻術を使い、ふたりして遁走を企てたものの追いつめられ、あわや、という場面だった——彼らが現れたのは。

あつという間に追っ手を斬り捨てて、剣士たちはふたりの少女を助けてくれた。そして、その時の貴公子はふたりにメダルを渡そうとした……身の安全をはかるのに有効だろう、と言って。今回仕事の依頼とともに送られたメダルがその時のメダルと同一のものは、ふたりして確認しあったことだ。乙女の横顔が刻まれたメダルだ。

先方は、女の戦士を必要としているという。しかも火急に。

良さそうな話ではあったし、報酬ははずむ、ということだ。

でも、やはり、どこか妙な話だ……話がうますぎる時には、きっと何かがある。

もっとも、仕事を選ぶ時期ではなかった。

このところエックブルト大公国の動きがにぶいせいで、ハラーマの中央平原はしばしの平穩を保っていた。

世の中が平和なのはめでたいことだが、そのせいでエフェラとジリオラは仕事にあぶれていた。

平時の傭兵として採用されるのは、女の身にはなかなか難しい。ひとりでも優秀な兵が欲しい、という最前線でこそ、ふたりのような女戦士でも活躍の機会が与えられる。

大きな合戦の噂が北山脈の方に立っている、という話を聞いて、旅立とうとしていた矢先……ふたりのもとに、使者が来た。

ふたりを、雇いたいというのだ。

仕事の内容については、その使者からは聞けないという。男はふたりに支度金を渡し、指定した場所に行って、その主人から直接話を聞くように、と指示した。

そして、その時……その男はふたりに主人から言付^{ことづ}かってきたというメダルを渡したのだ。指定された場所とは、エックブルト大公国の西（土の方位）の果て、黒死海に臨んだ城だった。

そしてふたりは、まだ少女だった頃の遠い記憶を思い出した。

「よりによって、あの時の人がエックブルト大公国の人だったとはね……」

「氣にくわねーのはそのことかい、エフェ？」

「あたしは別に。お金をくれる人はどこの国の人でも好きよ。」

エックブルトを嫌ってるのはあんたの方だと思ってたわ」

「嫌いだよ……エックブルトの大家家ってえのが好きじゃねえ。やり口がいろいろときたないし。」

でも、あんましぜーたくも言ってられないし。仕事だろ？

あの人はいいい人だったし、恩人だ。

だから、ま……行ってみようぜ、エフェ！」

ジリオラは元気に言って、馬の手綱たづなを引き寄せた。

（……あんたはいつもそれで、気楽でいいわねっ。

で、その後始末は、結局ぜーんぶあたしがしよいいこむことになるんだから！）

エフェラは、ちらりと恨みがましい目をジリオラに向けたが、それも一瞬のことだ。

「じゃ、そーゆうことにしましょ。」

オーリン、行くわよ！ もうちよっとで目的地よ！」

鞍の前に座った金色の髪と緑の瞳の少年にそう呼びかけると同時に、青い髪の女戦士は心の中で少年に語りかけてもいた。

（ジーラが、また、面倒を起こさないでくれるといいんだけどね、オーリン！）

少年はそっと宥なだめるような笑みを浮かべて、エフェラを見上げた。

もうすぐ、彼らは黒死海に出る。

いつのことなのかわからないほどの昔……古き神々と善なる力を司るゼルクの神々々が争った時代があったという。その神々の争いに巻き込まれて、人間は地上に落とされた、と伝えられている。神々の争いにより、人間が落とされたこの世界はかつてあった世界とは姿を変えたといわれているが、そこに人間は今の世界を築きあげた。

ハラーマ、ペロル、ザーン、ジャナ……今、人が棲む大陸はその四つのみ。

そしてそのどの大陸にも、太古の神々の戦いによってもたらされた歪みが残されている。

人が足を踏み入れることをいまだに拒むハラーマの魔界、大陸ジャナの地下迷宮、ペロルには近づくものをすべて氷に閉じ込める大氷壁があるという……。

さまよえる草・ソレンジュを力の源とするゼルクの魔法、あるいは今もこの世界に残されて遍在する力を利用する古魔術など、ギルドの魔道士たちが操る魔術もまた、太古の神々が残した強大な力による歪みのひとつにすぎない……そう、魔道士たちは語る。

そして、人が棲む四つの大陸で、最大の大陸であるハラーマ。

かつて、このハラーマにひとりの英雄が現れ、一代で大陸を制覇し、帝国を作りあげた。

ムアール帝国の祖、オカレスク大帝である。

オカレスク大帝はこのハラーマに秩序をもたらしした。

今でも流通貨幣として使われているオカレスク金貨は、このオカレスク大帝の命によって造られた統一貨幣だし、共通語として使われているオカレスク語もその当時、ムアールの言葉をもとにして造られた言葉だ。度量衡が整備され、長さの単位レームにロム、重さの単位シオム

が制定された。

だが、帝国が弱体化し、ハラーマが戦乱の時を迎えて久しい。

今、大陸の覇者として名乗りを上げている国々は、どれもかつてはムアール帝国の傘下にいた国々である。

中原の覇者・エックブルト大公国の公家とはといえばムアール宮廷で勢力を奮っていた名家だったし、ムアール帝国に最初に叛旗^{はんき}を翻した国として有名な北（水の方位）に勢力を持つアゼンダ王国にしても、もとはムアール帝国に忠誠を誓っていた地方地主の国にすぎなかった。

今も、ムアール帝国とオカレスク大帝を始祖として連綿と続くムアールの皇帝の血筋に敬愛の念を抱く者は多い。だが……長く続く戦乱に人々の心は飽き、次第にムアールとかつてこの大陸を制覇した偉大なる征服者への敬慕の心がハラーマの民草^{たみくさ}から薄らぎつつあるのも事実だった。

時は流れていた。

確実に。